

2. 松川浦地区の概要

(1) 地区概要

本地区は福島県北東部、浜通り北部に位置し、^{しんちまち}新地町と^{そうまし}相馬市にまたがる松川浦県立自然公園を含む面積約 100k m²の地域です（図－2）。

本地域を流れる代表的な河川には、地蔵川、^{うだがわ}宇多川、小泉川、梅川、^{につけしがわ}目下石川（いずれも二級河川）があり、地蔵川は直接、それ以外の河川は松川浦を経て太平洋に注いでいます。

本地区東部に存在する松川浦は、大洲と呼ばれる磯部地区から続く砂州の発達によって鶴の尾崎との間の湾が隔てられ、^{せきこ}潟湖となったものです。大小の島が点在する風光明媚な地域で、日本百景（海岸）の一つに選ばれています。

松川浦と太平洋につながる潮口は、かつて鶴の尾崎と磯部地区より北へ延びる砂州との間にありましたが（図－3）、松川浦の成因にともなった砂州の発達により、潮口がたびたび閉塞されることが多かったため、1910（明治43）年、現在の位置に人工的に開削されました。

本地域内には松川浦の他に^{にいぬまうら}新沼浦（新地町・相馬市）、^{やまし だうら}山信田浦（相馬市）と呼ばれる潟湖がありましたが（図－3）、大正から昭和にかけて干拓され、新沼浦は新地発電所及び相馬中核工業団地に、山信田浦は水田地帯へと姿を変えています。

この地域の気候は、太平洋側気候で梅雨から秋にかけて降水量が多く、冬は少なくなっています（気象庁 気象統計情報）。また、春から夏にかけては、「ヤマセ」と呼ばれる湿った冷たい北東風の影響により、くもりの日が多くなります。冬は乾いた西風が吹き、晴れる日が多く、雪はあまり降りません（相馬市 HP より）。

地域の人口は、相馬市（38,139人）、新地町（8,449人）となっています（平成22年版 全国市町村要覧）。

主な産業は、松川浦で行われる海苔やアサリなどの養殖、松川浦漁港に水揚げされるホッキ貝やカレイ、カニなどの漁業を中心とした水産業、稲作や畜産などの農業といった一次産業と大規模な工業地帯があるように第二次産業があり、就業者の約4割を占めています（平成17年国勢調査）。

また、国の重要無形文化財に指定されている相馬野馬追や海水浴、釣り、潮干狩りなどのレジャー、景勝地である松川浦といった観光業などがあります。

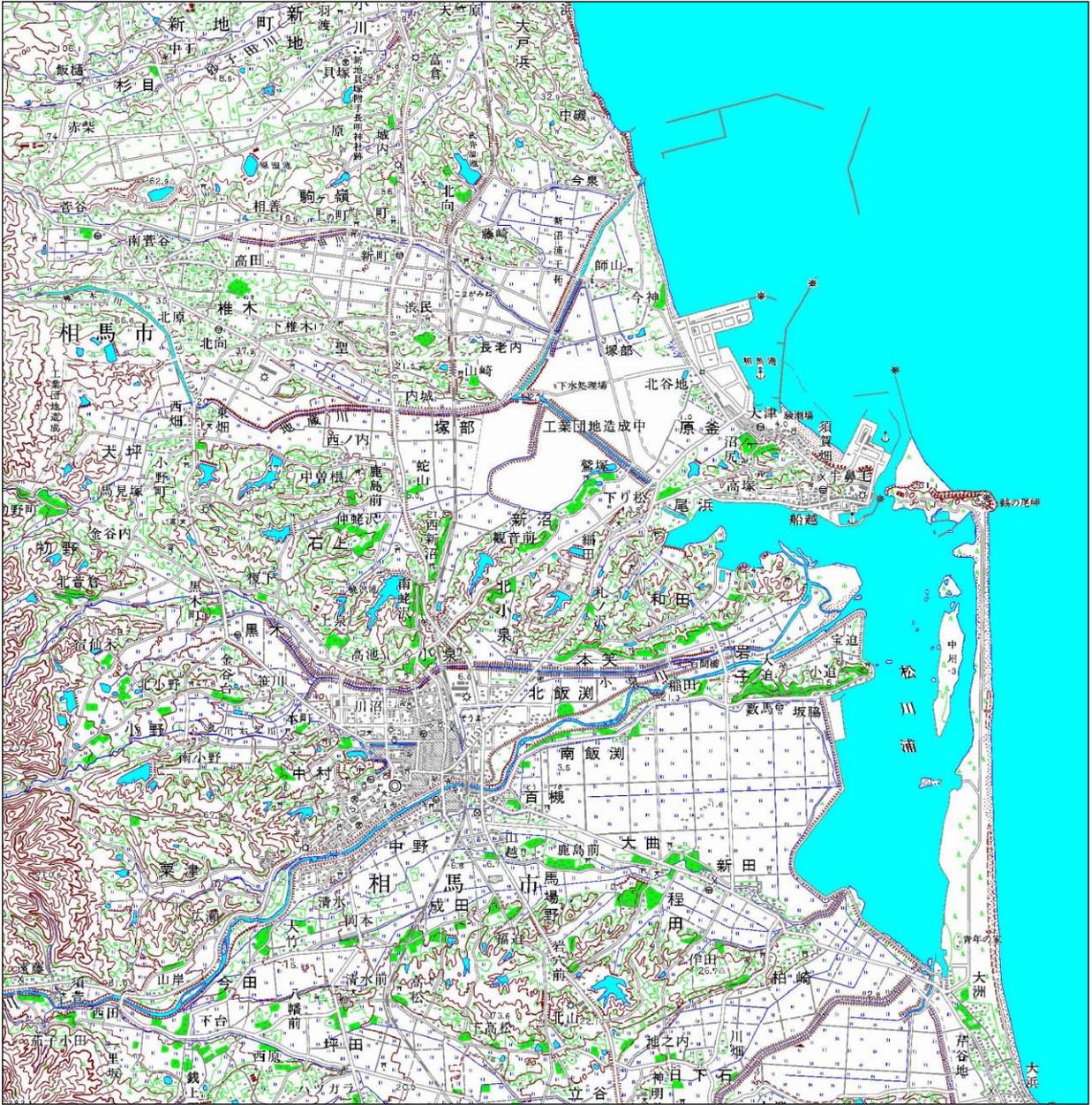


図-2 松川浦地区の調査範囲

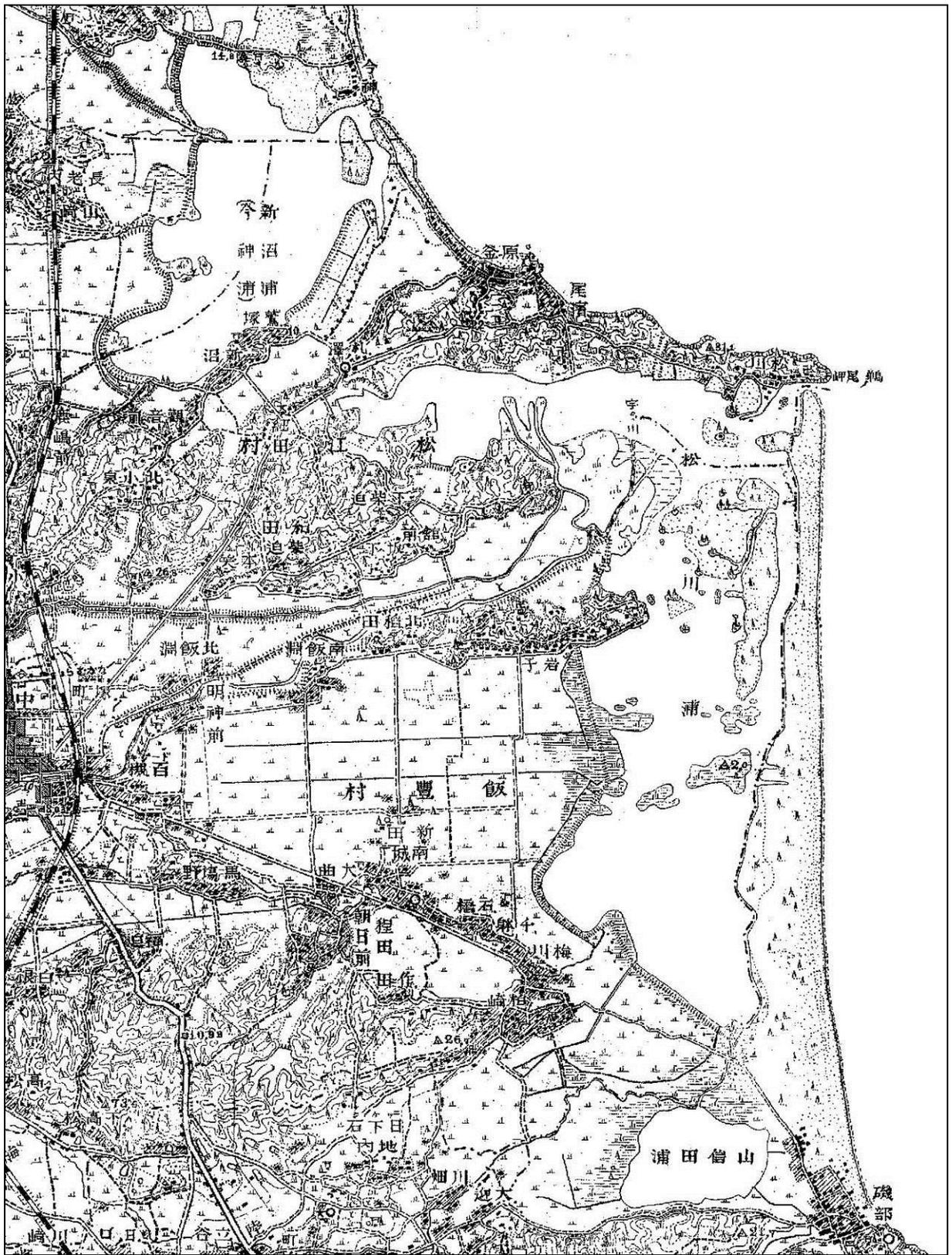


図-3 明治41 (1908) 年測量 5万分1地形図「角田」「中村」の一部

(2) 松川浦の変遷

かつて存在した新沼浦、山信田浦といった潟湖は干拓され、現在残っているのは松川浦だけです。ここでは松川浦の江戸時代から現在までの変遷を当時の地図や空中写真などをもとに紹介します。人工的に開削された潮口や埋立て、湖岸線の変化が読み取れます。

1) 江戸末期の松川浦

江戸末期に幕府の命により、伊能忠敬が日本全土の測量を行い、伊能図を作成しました。松川浦周辺部は1801年、旧暦8月16日に測量を行っています。伊能図では、沿岸及び沿道はきわめて正確に表現されており、当時の松川浦の様子を知ることができます（図-4）。

伊能図は国土地理院HPの古地図コレクション（古地図閲覧サービス）の伊能大図彩色図（<http://www.gsi.go.jp/MAP/KOTIZU/sisak/ino-main.html>）から閲覧することができます。

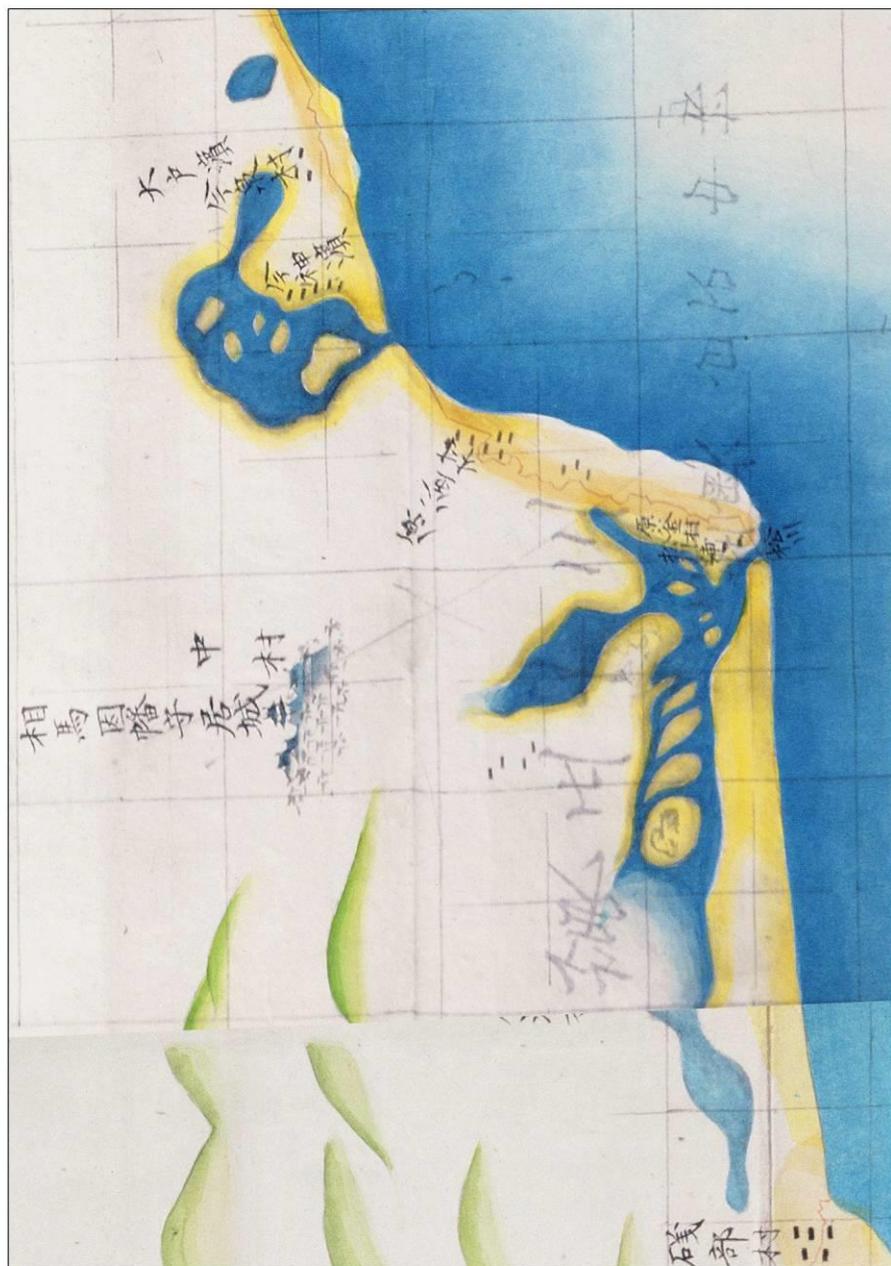


図-4 伊能大図彩色図「陸奥 白石 中村」「陸奥 行方郡 標葉郡」の一部

2) 松川浦の変遷調査

土地の変化を調査するには正確な地形図が必要です。松川浦が記載された地形図は、国土地理院の前身である参謀本部陸地測量部（写真1）が1908（明治41）年に作成した5万分1地形図「中村」（図-5）が最も古く、後に国土地理院が作成した同縮尺の地形図と刊行年次順に比較し、松川浦がどのように変化したのか調査を行いました。

松川浦が記載されている5万分1地形図のうち、明治41（1908）年測図、昭和8（1933）年修正、昭和27（1952）年応修、昭和43（1968）年資修、平成4（1992）年修正を使用しました。これらの地形図を基図とし、スキャニングを行い、GIS（地理情報システム）を用いて各年代の湖岸線及び島の数及び松川浦の面積の変遷を調査しました。



写真1 陸地測量部



写真2 当時の地形測量の様子

a) 1908 (明治41) 年の松川浦

1908 (明治41) 年頃の松川浦は南部に湿地が広がり、小さなものを含めると30以上の島があったことが分かりました。当時の松川浦の面積は5.50km²でした (図-5)。また、この図から、明治41年より始まった松川浦北側の新しい潮口の開削工事が分かります。

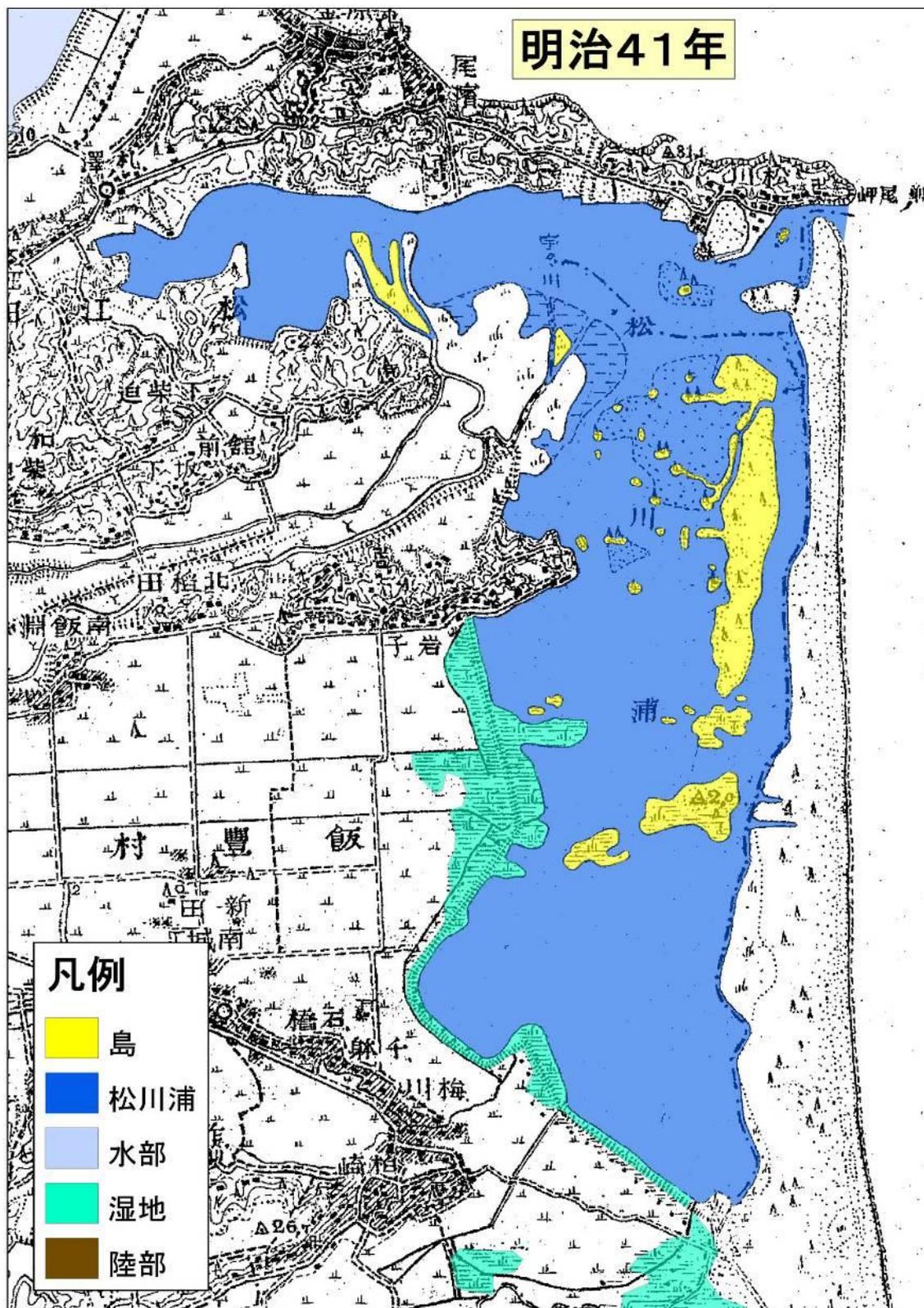


図-5 1908 (明治41) 年の松川浦

C) 1952 (昭和27) 年の松川浦

1933年から19年後の松川浦は護岸化が進み、南部の湿地が減少し、中央部の岩ノ子地区南部の湖岸線の形状が変化し、湿地や島は消失しています。また松川浦内の島が分かれて複数になったことで島は中央付近の島が消失していますが、数は増えています。しかし島の総面積は減少しており、1908年では0.6km²でしたが1952年では0.4km²になっています。その分、松川浦の面積は5.8km²に増加しました(図-7)。

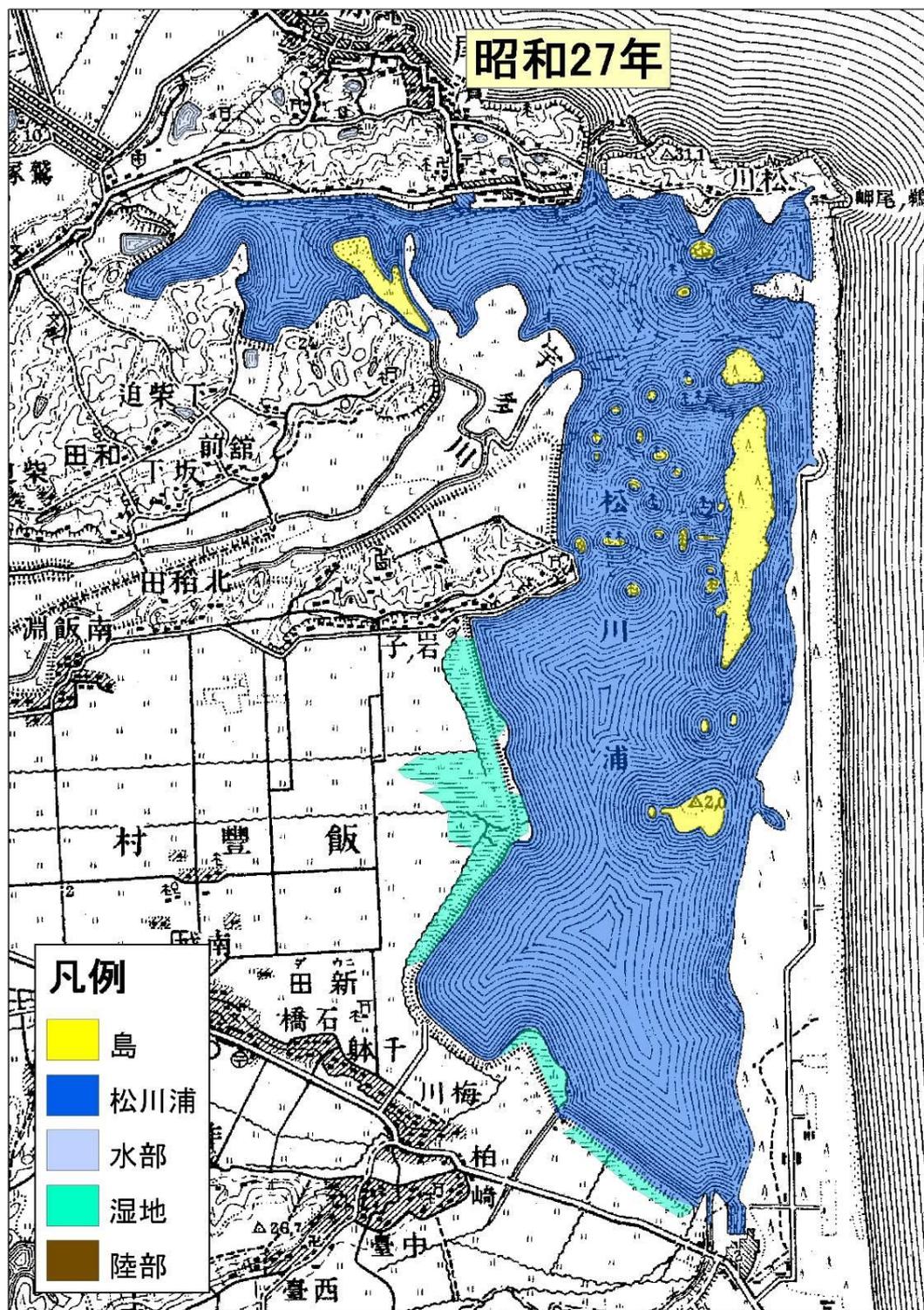


図-7 1952 (昭和27) 年の松川浦

D)1968（昭和43）年の松川浦

1952年から16年後の松川浦は中央部の小泉川や、宇多川河口部分の堆積地（三角州）が大きくなっているため、松川浦の面積は5.6km²に減少しています（図-8）。

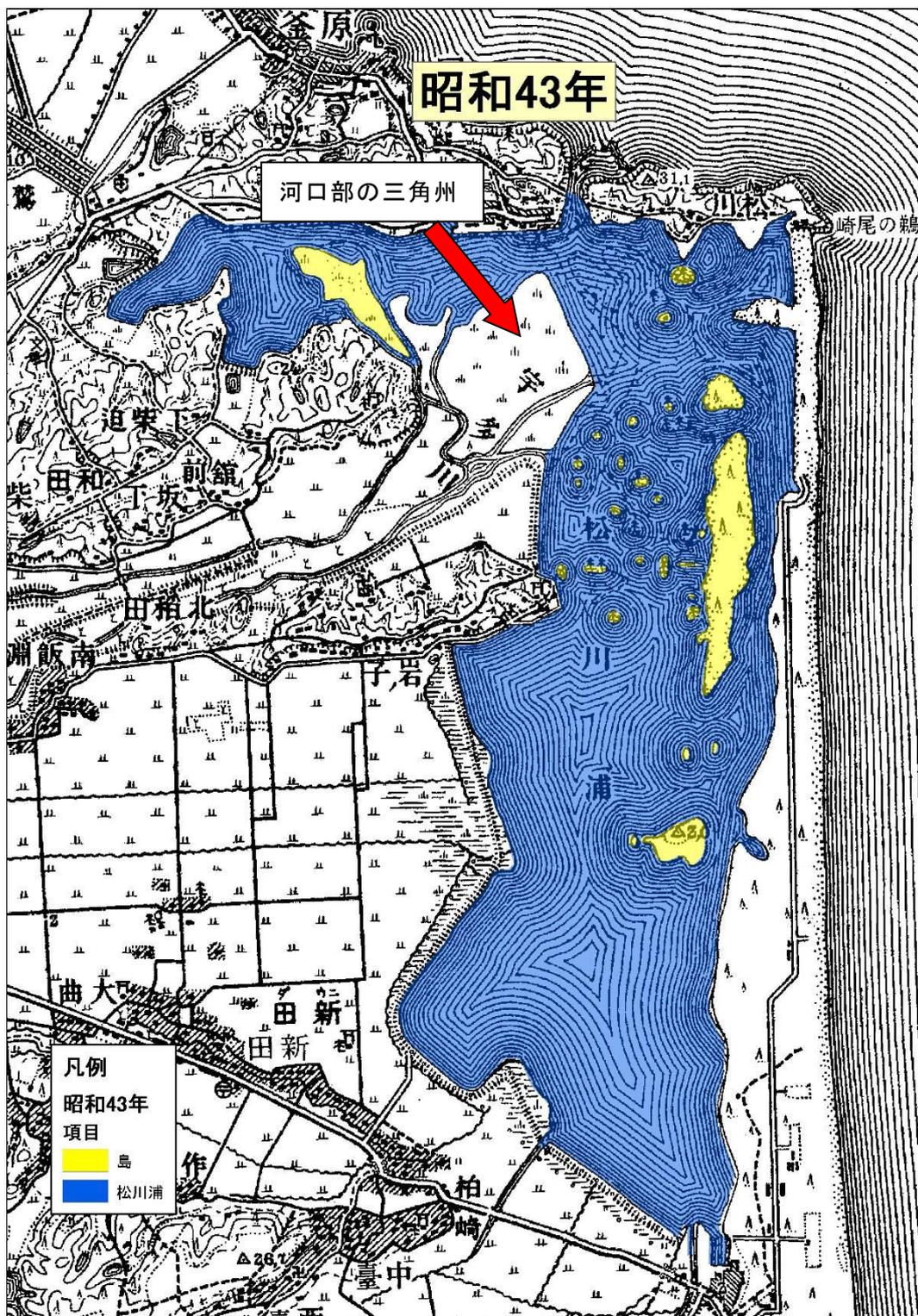


図-8 1968（昭和43）年の松川浦

E)1992（平成4）年の松川浦

1968年から24年後の松川浦は埋立てが進み、湖岸線が大きく変化しています。また島の数は17に、面積は0.3km²に減少しています（図-9）。松川浦の護岸の整備が進み、現在の松川浦の湖岸線になっています。南部に残っていた湿地は田に変わり、無くなっています。

なお潮口に架かる松川浦大橋は1995（平成7）年6月に開通しています。

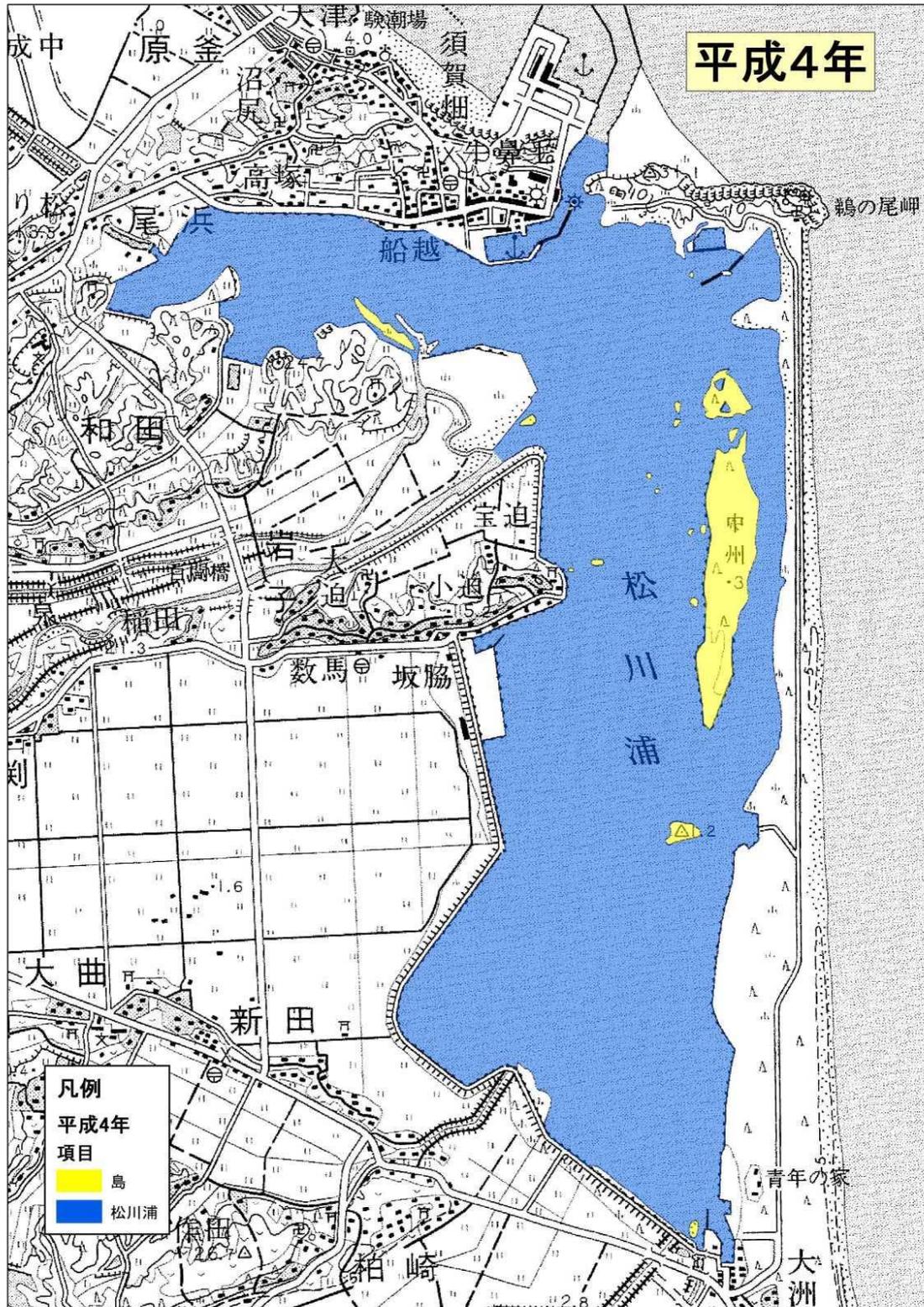


図-9 1992（平成4）年の松川浦

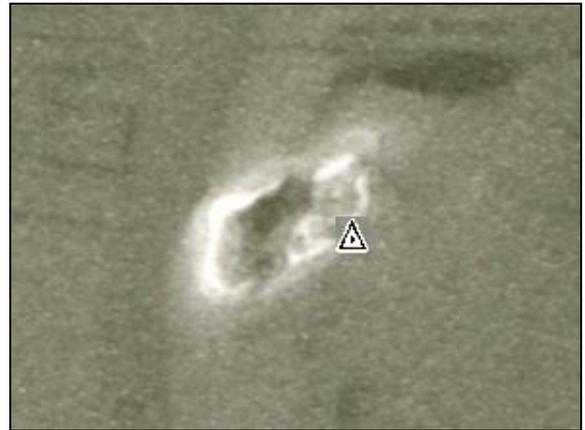
(3) 島の侵食

国土地理院では、全国土を対象に戦後から繰り返し撮影された、空中写真を保有しています。松川浦を撮影した最も古い空中写真は1947（昭和22）年の米軍撮影のものです。その後も繰り返し、空中写真が撮影されており、松川浦の変化も克明に記録されています。

松川浦中心部より、少し南に大洲島と呼ばれる島があり、この島には明治期に三角点（三等三角点「新田」）が設置されましたが、島の侵食により水没したため、1999（平成11）年に廃点となりました（写真3）。この島を例に侵食状況を各年代の空中写真で比較しました。



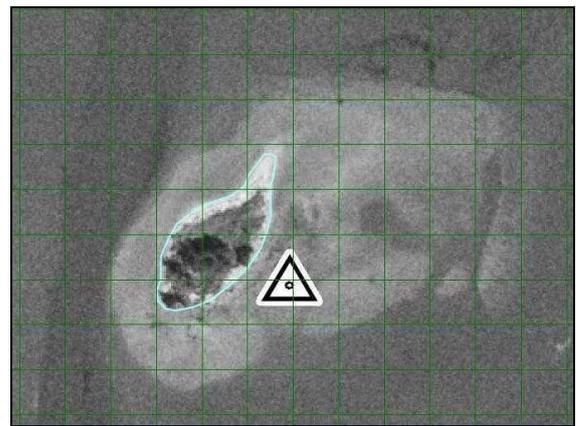
1947年 米軍撮影



1997年 国土地理院撮影



1952年 米軍撮影



2006年 国土地理院撮影



1975年 国土地理院撮影



現在の大洲島 (2010.6撮影)

写真3 大洲島の変遷